

平成 23 年 11 月 19 日

北関東フォーラム

於：シムックス

中齋塾 北関東フォーラム

平成 23 年 第 9 回講話

先ほど福島幹事に論語の素読をして戴きました。淡々と気負いがなく、大変上達したと感ずます。中身が分からないとなかなか上手に読めませんから、読みこなしているなと感じました。

人間は変わりますね。先日、交友のある声楽家で音楽療法士の方のコンサートに家内と行きまして、上手くなったと驚きました。豊穰という文字が浮かびました。内面が豊かになると、こんなに歌声が変わるものかなと、つくづく感じました。

「男子三日会わざれば刮目して見るべし」と申しますが、ある日突然どこかでガラッと変わる、人間そういうことがあるなと思いますので、自分自身の未来に向かって、楽しみをたくさん持つとよいと思います。

夫婦の手入れ

先ほど塚越代表幹事が、「夫婦の手入れ」という話をされました。私は夫婦の手入れをだいぶ長くしておりますが、出だしは子供がきっかけです。夫婦喧嘩をした時に、当然口喧嘩ですが、「お父さんとお母さんが喧嘩をしているのを僕は見たくない」と言いました。グサツときまして、それ以来、喧嘩は止めました。

夫婦で行く旅行も、会社を創って最初の頃は家内にずっと負担をかけましたので、途中で反省をしまして、お返しをせねばならないなと思い、家内にごまをするつもりで始めたのです。夫婦の心が冷えた時元に戻すには何が良いか、ずっと考えたら何のことはない、プレゼントはいらないのです。一緒にいる時間、一緒に話す時間を増やせばよいのだと気がつきました。今は毎月 1 回、月末に何処かへ行っています。時間が取れる時には遠くへ行ったりしますが、先日は紅葉を見に赤城へ行ったり、都内の日比谷公園だったり、何処でもよいのです。

ということで、夫婦の手入れは、心が冷えた時何とか元に戻そう、何とか良い関係にしたいと思って始めました。苦い水を飲むと、何かその対策を練ることによって始まるようです。

私が年4回出している四季だよりも、実は苦い水を飲んだことによって始まったのです。ずいぶん前になりますが、上毛新聞の社長にお会いした際、「深澤さん、最近顔を出さないねえ。便りのないのは良い便りと言うけれども、たまには連絡をよこさないさい」と言われ、しょっちゅうは顔を出せないけれども、ならばハガキを書こうと思って、ついでに日頃ご無沙汰している方にも出してしまおうと思ったのがきっかけです。なかなか会えないけれども会いたい人に自分の近況や考えていることを連絡するというつもりで、年に4回年賀状を出すつもりで始めました。前回の四季だよりで100回になりました。私の書いた四季だよりをずっと持っているという方がいて、「深澤さんの心境が分かるから」と言われました。私の四季だよりに刺激されて、夫婦で出かける習慣がついたという方もおられます。

四季だよりをずっと続けていくと、知らず知らずのうちに広がって行くもので、色々なところから思わぬ反響があります。今年1月の四季だよりに、今年は日本人は稀有な体験をする。辛く・むごく・悲しい、そして大勢の人々が死ぬという巡り合わせの年だという内容を書きました。そうしましたら、二松学舎の理事長から天変地異を当てたと言われました。又、別の方からは来年の年賀状が楽しみだと言われました。今日は、来年の話も少ししようと思っています。

もう一つ、塚越さんの話の中に「愛」という言葉が出ていましたので、「愛」という文字についてお話しします。加藤常賢先生の「漢字の起原」という辞書に、「愛」の語源は食べ物の人様にあげることとあります。全部、愛はそこに繋がってくると思います。

後ほど申しますが、さまざまな人類の問題点、人口の爆発とか金融危機とか環境問題の悪化といったものを全部押し詰めていくと、人間が飢えて死ぬというところに直結します。飢えて死ぬのを救うキーワードは「愛」で、食べ物を人様に差し上げるということです。

明日を過去形でイメージする

では、恒例の質問を致します。

昨日一日嘘をつかなかった方？

ほとんどの方がさっと手を挙げてくださいました。嘘をつかないと、朝起きた時に爽やかな目覚めが自分を迎えてくれます。嘘をついて、それがずっとこびりついていると、いやな夢を見たり爽やかではありません。嘘をつかないのは良いことです。

昨日一日、有難うと言い・有難うと言われた方？

昨日一日、良い一日だったと思い返せる方？

昨日、何かご自分の健康法を実践した方？

ちょっと少ないですね。年を重ねてくると、どこか痛みが出てきます。ですから健康法は実践されるとよろしい。

先日私は、胸がつるという経験をしました。舘野先生がおられた時は、道場で朝方稽古をして身体中をよくほぐす動きをしていましたから、普段使わないような筋肉に負荷をかけてもそれを吸収出来ていました。だんだん年をとってくると、思いっきり力を出した時に、負荷がかかって、突然とんでもない所がつったり普段と違う所に痛みが走る。そういうシグナルがでたら、年をとったと自覚して、身体のマッサージ・身体の手入れをされるとよろしい。

昨日寝る時に、「明日は良い日だったな」と過去形でイメージできた方？

例えば、明日は何をしようと考えて寝るとします。それを<明日はこれをする日で、思い通り出来てよかったな>と過去形でイメージできると、まず間違いなくそれはスムーズに出来ます。<どうかな大丈夫かな、もしかしたら上手くいかないかな>と思って寝ると、やはり出たところ勝負になってしまいます。過去形でイメージできれば大丈夫だというのが、西洋東洋問わず成功の秘訣です。ぜひ明日を過去形でイメージするようにしてください。

紹介書籍

今日は後半に干支の話を致します。干支の話をする時に、60年前はどのような時代であったか、60年周期でみていきます。

60年前をみるのに丁度良い本がありますので、皆様にも紹介いたします。「決定版昭和史 S26~30年」で、毎日新聞社から出ています。昭和27年頃は吉田茂首相にそろそろ翳りが見えるかなという時代で、力道山が活躍をしていた頃、天皇陛下が皇太子として正式に認められる立太子の礼を企画した…それらが写真入りで分かりやすく載っています。

次に、主婦の友社から出ている50代の婦人向けの雑誌「ゆうゆう」です。「足るを知る生き方のコツ」という特集が出ていましたので回覧します。その中で、93歳の吉沢久子さんという方が書いた記事が目につきました。吉沢さんは大震災の後、感じたことが三つあるそうです。ものは一瞬にしてなくなるからいらない、という<もの離れ>。そして、幸せ感の変化。更に毎日を丁寧に生きることが大事だと書いています。

幸せ感ということで申しますと、今ブータンの国王夫妻が来日していますが、ニュースで結構流れています。ブータンは国民総幸福量(GNH)を追求する国として、スポットライトを浴びています。一国のトップの責任は、国民が幸せになることが一番重要で、それは決してお金を沢山持つことではない。国民が幸せだと感じる生活環境を作り出す、国

民が本当に幸福だと思う国家を作ることの方針として打ち出した国です。私も3年前にブータンを訪れましたが、確かに人々はニコニコして幸福だというように感じました。特にお年よりがとてもニコニコして暮らしていました。

先日、ブータンについて紹介する写真展と講演会が広尾の地球村でありましたので行ってきました。そこに荒川区から役所の方が来て話しをしました。荒川区もブータンに見習って荒川区民総幸福度（GAH）という研究を始めたのだそうです。職員をブータンに派遣して、ブータンに学んでいるという話をしていました。その資料も回覧します。

今日の紹介書籍は貝原益軒の『養生訓』です。岩波文庫と講談社学術文庫から解説書が出ています。先ほどの代表幹事の挨拶に夫婦の秘訣は「忍」だとありましたが、貝原益軒も長生きの秘訣は「忍」だと言っています。忍＝我慢です。我慢するということは、ほどほどということです。貝原益軒は「食事は空腹を避ける程度の量で良い」と書いていますが、それは我慢することを意味します。

本日の論語

では論語の説明に入ります。本日は子罕第九 1~6です。

論語を読んで、良いなと感じる科白が一つ見つければそれで文句なし。それをどんどん掘り下げていく。掘り下げる時には、色々な先生が解釈をしていますから、その中から自分が頷けるものを取り入れればよろしい。

【一】 子 罕に利を言う。命と与にし、仁と与にす。

孔子が滅多に言わない利（利益）について話をされた。運命と仁徳について、利も一緒に言われた。

私は「利」という文字がでると、自動的に「利によりて行えば怨多し」が浮かびます。これは渋沢栄一さんの一生涯を貫く判断基準でした。目先の利益につられて手を出すと、後で必ず大きな厄介事・揉め事が起きる。だから目先の欲につられてじたばたしなさんなという意味です。

これを自分自身で味わう時には、自分自身の運命について考え、自分自身に仁徳がどの程度あるか考え、そういう根っこの上で利を考えればよろしい。

利益について考えるのであれば、例えば困った事があったとか我慢できる素晴らしい事が成し遂げられたとか、何か自分にとって大きな事が起きた時に、自分の動機が何であったかを考え直してみる。そしてそれが私欲であったとしたら、もう一度見直しましょう。

天下万民のため・国家社会のため、縮めれば人様のために実行してそれが役に立ったということであれば、自分自身に利として大いに返ってくる。渋沢栄一さんはこれを「道德経済合一説」として世間に広げました。渋沢栄一の知人であった友人の三島中洲は、「義利合一説」という表現で世間に発表しています。

【二】 達巷党のひと曰く、大なるかな孔子、博く学びて名を成す所無しと。子之を聞きて、門弟子に謂いて曰く、吾何をか執らんか、御を執らんか、射を執らんか。吾は御を執らんと。

達巷とは地域の名で五百件くらいの部落です。

達巷に住んでいる人たちが、「先生は立派だ。沢山の学問を学んで身につけて、しかも有名にならないようにしておられるようだ。これは素晴らしい」と言った。

孔子がこれを聞いて、門弟の人たちに言いました。

私が有名でないということだけれども、ではこれから何で有名になろうか。有名になるために私は御者になろうか。それとも弓を射る射手にでもなろうかねえ。御者になれば私は能力を発揮できそうだから、御者になって有名になろうかねえ。

これは孔子が軽口を言ったのです。孔子が話をしている時は、真面目くさって謹厳実直にしていなければならぬような気がしますが、このあたりは孔子が冗談めいて軽口をたたいたと捉えてください。孔子が真面目くさったイメージの人だけではないという一面が出ています。

ちなみに今、「孔子の教え」という映画が銀座で上映されています。孔子には女性の話がほとんど出てきません。南子という女性が、淫乱なお后ということで紹介されている程度です。映画では、その南子が絶世の美女として登場するという話でしたが、見た方に話を聞くと、ほんの少ししか紹介されていなかったようです。来月早々には見に行くつもりです。

【三】 子曰く、麻冕は礼なり。今や純なるは儉なり。吾は衆に従わん。下に挿するは、礼なり。今上に挿するは泰なり。衆に違ふと雖も、吾は下に従わん。

麻冕は麻で作った大礼服用の冠です。純は絹糸です。絹で冠を作るのは儉約で、麻糸で冠を作るのは非常に手間隙がかかって大変です。

孔子が言うには、麻の冠は古礼にかなっている。今は絹糸で作った冠を使うけれどもそれは儉約のためだ。儉約は大いに結構なことだから、私は大衆の考え方に従って行動する。礼拝する時は、御殿の下で拝するのが古礼である。今は御殿の上で礼拝するが、これは驕り高ぶりである。礼拝をする時には、私は古礼を尊重し大衆には従わない。

【四】子^し 四^よつを絶^たつ。意^{いな}毋^なく、必^{ひつ}毋^なく、固^{こな}毋^なく、我^が毋^なし。

孔子が四つを絶った。

意は私欲、必は無理押し、固は固執、我は我をはるということです。

こういうものはしないようにしたい。そして実行したということが孔子の自信にも繋がっていると感ずります。

【五】子^し 匡^{きやう}に畏^いす。曰^{いわ}く、文^{ぶん}王^{のう} 既^{すで}に没^{ぼつ}したれども、文^{ぶん} 茲^{ここ}に在^あらずや。天^{てん}の将^{まさ}に
斯^この文^{ぶん}を喪^{ほろぼ}さんとするや、後^{こう}死^しの者^{もの} 斯^この文^{ぶん}に与^{あずか}ることを得^えざる。天^{てん}の未^{いま}だ斯^この文^{ぶん}
喪^{ほろぼ}さざるや、匡^{きやう}人^{ひと} 其^それ予^{われ}を如何^{いか}にせん。

匡という町に孔子一行が通りかかった時に襲われた。

かつて魯の国の陽虎という人物が匡を襲って、匡の人々を苦しめたことがあった。匡の人々は、容貌魁偉な孔子が陽虎に似ていたので、誤って孔子を襲ったのだと云われています。

門弟は慌てふためいたけれども、孔子は少しも動じないでこう言った。

文王（周の国の初代君主で、素晴らしい君主）が作った礼楽制度・文化が私の身体の中にあるではないか。天が今、この文化を亡ぼそうとするであろうか、そんなことはない。私の身に付いている文化を天が亡ぼそうと考えるものか。私を殺すことなど出来るわけがない。

後死の者とは孔子自身です。ちなみに湯島聖堂は斯文会と言いますが、この論語からとっています。

匡の人々は間違えて私を襲ったけれども、そんなことは意に介することはない。私は天から使命を与えられているので、その使命を果たす前に殺されたりはしない。私はこの世でやらねばならぬことがあるので、彼らがいくら私を殺そうとしても、殺すことなど出来るわけがないという自信をもっている。皆この自信の元に匡人を退けなさい・・・と門弟

に言っている状況です。孔子の自信がここに大きく示されています。

【六】 たいさい しこう と いわ ふうし せいじゃ なん そ たのう しこういわ 大宰 子貢に問いて曰く、夫子は聖者か。何ぞ其れ多能なるやと。子貢曰く、
もと てん これ ゆる ほとん せい また たのう し これ き いわ たいさい われ 固より天 之を縦す。将 ど聖にして、又 多能なりと。子 之を聞きて曰く、大宰 我を
し われ わか いや ゆえ ひじ たのう くんし た た 知るか。吾 少きとき賤し。故に鄙事に多能なり。君子は多ならんや。多ならざるなりと。
ろういわ しい われ もち ゆえ げい 宰曰く、子云う、吾 試いられず。故に藝ありと。

大宰（大きな国の総理大臣をした人間）が子貢に聞きました。

孔先生は聖者ですか。なぜ何でも出来るのか。

子貢が言いました。

天は孔子が多才であることを許している。ほとんど聖人で、尚且つ大きな能力を持っている。

この時代、何でも出来る人は聖人君子にはなりません。何でも出来る人は卑しいと思われていました。聖人は多才ではないというイメージがあるので、子貢は苦しい返事をしたわけです。

孔子がこれを聞いて言いました。

あの総理大臣は私のことを知っているのか。私は若い時は身分が低かった。したがってつまらない仕事をよく覚えたのだ。君子というものは多芸であってはおかしいが、私は多芸になっている。これは若い時に色々なことをしたからだ・・・と孔子が述懐しています。

宰（衛の国の人で孔子の弟子）が言いました。

孔先生は言われた。「吾は若い時には世の中で用いられなかった。従って生きるが為に色々なことを覚えたので芸が身に付いたのだぞ」と。

論語を読む時には、何か良いなと思う言葉を見つけて、それがイメージで浮かんでくる、動画のように中にいる登場人物が動いて科白を言うようなイメージができれば、論語は完全に合格と言えます。

来年の干支・壬辰（じんしん・みずのえたつ）

来年の干支は壬辰（じんしん・みずのえたつ）です。

加藤常賢・安岡正篤・白川静・簡野道明といった先生方が文字の成り立ちを調べていますが、それらをよく読み総合的にまとめてみますと、壬辰とは将来に向かって希望の種が

時かれる年と解釈できます。その希望の種を、一所懸命水をやって成長させていく役割の人間が出てくる年だと読みとれます。

安岡干支学では 60 年前を考えます。60 年前はどんな年であったか、60 年前に照らし合わせて考えます。

結論から申しますと、「泥沼に入り、ずぶずぶと沈んでいく年」です。どぶ泥のような腐臭を放った底なし沼のようなところに、落ちるのではなくはっと気がつくと入っていることが分かり、ずぶずぶと沈んでいく実感がある。しかし手を伸ばせば助けを呼ぶことも出来るし、ロープが差し伸べられて、それに捕まれば引き上げて貰うこともできる。そういう希望がある年であると感じます。

今年（平成 23 年）は辛卯（しんぼう）辛く酷く沢山の人が亡くなる年であると年初に申しました。来年は、もう転がり落ちてしまいましたから、否応なく世界全体は底はあるけれど汚れて腐臭を放つ泥沼に入って、人類全体が沈みつつあります。このまま何もしないでいくと、ずぶずぶと沈んでいって、そのうちどぶ泥が首まで来て、口まで来て、鼻まで来て、最後は沈んでしまう。そういう恐怖感に苛まれる年です。まずは自分自身が助かる為に、自分の家族が助かる為に、自分に縁のある人が助かる為にはどうしたら良いかを考え、実行していく年です。完全に下に潜ってしまう時の為の準備を、一所懸命する年であると考えています。

今まで私は、大地震も近い、再度大きな自然災害が起きる、鳥の強毒性新型インフルエンザが蔓延する危険性がある、と言い続けていました。その為の準備をおさおさ怠りなきようにしなければなりません、来年はそういう目に見えた大きなものは出ないと感じています。大きな出来事が直撃するというのではなくて、知らず知らずのうちに危機が忍び寄って、まとわりついて、引きずり込んでいくという気がします。

ですから先ほど代表幹事が言われた心身の手入れもそうですが、もう一度色々なことを見直しをするのがよろしい。見直しを一所懸命する年だと思っています。自分の身体は大丈夫か、持っているものは大丈夫か、身の周りを点検をしてください。

余談ですが、今、3 万人くらいの方が誰にも気付かれずに死んでいく、いわゆる孤独死で亡くなっています。先日テレビで特集をしていましたが、孤独死をしかねないような人が、自分が死んだ後に周りに迷惑をかけないようにと、片付け業者に後始末の見積りをしてもらっていました。1DKの部屋に荷物がいっぱいになって片付けられないのですが、葬式も含めての見積りは 30 万円近い金額でした。その人は見積りを聞いてほっとしたと話していました。迷惑をかけずに死ぬ為にはどうしたらよいか氣遣って、後始末までしてか

ら死ぬという人も、だんだん出てきたのだなと思います。

ということで、来年は日本の国をよく見直しする、自分の身の周りを見直しすることが必要です。自分の死に方の準備、お墓の用意や、財産があれば相続の準備等、自分が死ぬということを前提にして準備しておく必要がある。これは老若男女関係ありません。そういう時代に来ているとお考え下さい。

中斎塾では本質・大局・歴史からものをみるように申しておりますので、来年（平成 24 年）をこの 3 つの視点から見てください。

本質からみると、人類は淘汰される時期に入ってきていて、人類が持っている文明・文化でみれば、西洋から東洋に移ろうとしています。

先月の末に世界の人口は 70 億人を突破しました。あまりにも増え過ぎました。1804 年に世界の人口は 10 億人でした。予測では、72 年後に 100 億人となるそうです。

人口問題の次には、当然、食糧危機が訪れます。先日のブータンの写真展では、ブータン以外の国の子供たちの餓死に瀕している写真が並んでいました。江戸時代の妖怪変化の図のように、あばらがへこんでおり、お腹が極端に膨らんで、頬がこけ目だけが異常に大きな、餓死する寸前の子供たちの写真でした。こういう子供たちが今、発展途上国でどんどん増えているのです。幸いにして世界各国、様々なボランティア団体が子供たちを救うべく動いていますが、効果はそれほどあがっていないように感じます。ユニセフ等に寄付が集まっても、日本でさえ未だに東日本大震災の被災者に届いていないのが事実ですから、いわんや発展途上国で餓死寸前の子供たちに送られる援助金は、ほとんどが途中で蒸発しているのです。1割届けば御の字だという話を聞きます。

世の中、そうそう生き延びられる時代には入っていないのです。人口が多すぎる。飢えに苛まれる子供たちが多すぎる。そして自分たちが寄って立つ地球という星も、環境が悪化して生きてはいけない時代に到達しています。それぞれの国がエゴを出し合って、エゴとエゴがぶつかり合うのですから、人類が生き延びていくような状況では全くない。マクロの視点から本質論で見ると、人類は滅びる道に向かってまっしぐらという状況です。

次に、大局で見るとどうでしょうか。色々な国の立場、色々な人々の立場、色々な視点でものを見ることによって大局が見える。飛行機に乗って下を見渡してみる感覚、高い所から見下ろして車が動いているのが小さく見えるような、そういう目線で見ると、大局観が自然と養えます。少しずつ自分のイメージを上げていくことによって、大局観が身についてきます。

最後に歴史についてですが、これは調べれば良い。歴史は繰り返すという視点で眺めると、こういう時代にこういうことがあった しかるべくして起きた 同じような条件であれば今回も似たようなことが起きるであろうと考えます。

先ほどご紹介した毎日新聞社の写真集から見ますと、今の時代と条件が似ているものはデモです。昭和 27 年 5 月 1 日、血のメーデーがありました。重軽傷者がデモ隊では 2000 人近く、警察官の発砲で亡くなった方が 2 名、70 名が重症、1800 人が軽症です。警察官側は 48 名が重症、167 名が軽症です。逮捕された人が 1232 名で、そのうち 261 人が起訴されています。

なぜそんなデモが起きたか。日本が戦争に負け G H Q に占領されて、占領国民ですからまともなものが言えない時代です。食べるものがなくて、売春婦や乞食が巷にあふれていました。そんな中、4 月 28 日に吉田茂総理が結んだ講和条約が発効しました。吉田茂さんはその頃、7 年 2 ヶ月に渡って総理大臣の地位にありました。講和条約が発効されて、日本人がこれから生き抜こう・発展させようと希望に燃え出してきた時期でもあります。デモが起こって治安が悪化したので、アメリカが日本に対して軍備を要求してきました。吉田茂さんは、軍隊は作らないと主張していた時期もありながら、軍備を用意しなければ日本は独立国家として生きていけないので日本を軍備化したいという要求をアメリカに出しています。そしてアメリカの要請で昭和 27 年 10 月 15 日に保安隊という自衛隊の前身が発足しています。29 年には自衛隊になりましたが、最初のスタートは 12 万人の保安隊でした。

つまり日本の国内は滅茶苦茶に揺れ動いていて、希望も見えるけれども現実には飯が食えない、混乱・混沌の状態でした。血のメーデーの後、27 年 7 月 4 日に破壊活動防止法（破防法）が成立しました。

もう一つ別の視点で、60 年前の時代を見てみましょう。私は今年初めに、新聞を読む時の 3 つの視点、自然災害・国債・民主党の無様な手を見ましょうと申しました。民主党の無様な手とは、政治を見ることです。国債は、経済がどうなるかを見ることです。自然災害は、自然がどういう猛威を揮っているかを見ることです。

まず 60 年前の政治です。昭和 27 年 11 月 27 日、池田通産相が衆議院で「中小企業の倒産・自殺もやむを得ない」という発言をして、29 日には不信任案が可決しました。ですから政治は、物議は醸すけれどもまあまあ機能しているという状況です。その翌年は、吉田茂総理のバカヤロー解散がありました。バカヤロー解散は、実際には質問者が自分のことを棚に上げて追求したのに対して、吉田総理が「バカヤロー、自分の足元を見る！」とい

う腹の中の言葉をふっと漏らしたのをマイクが拾ってしまったのです。

経済で見ますと、「中小企業の倒産・自殺もやむを得ない」という発言があったくらいですから、経済はまともに機能していない。食べるものがまともにない時代です。政治経済が滅茶苦茶なのです。

自然災害については、その頃放射能がありました。昭和 29 年ですが、ビキニ環礁で死の灰が降っています。それによって第五福竜丸の乗組員が被爆し、日本国中が大分騒いだ事例があります。27 年では、日航機もく星号が墜落し、全員死亡しています。北海道十勝沖と三陸地方でマグニチュード 8.1 の地震が起きています。9 月には観測船第五海洋丸が火山の爆発に巻き込まれて沈没、全員死亡しています。

こうした混乱・混沌の時代の中で、ちょっとした憂さ晴らしは、力道山のプロレスくらいでしょうか。

いずれにしても、ずぶずぶと泥沼に入って沈んでいくのだが、一所懸命そこから飛び出そうと思って動いている人たちが、その頃は沢山いました。明るい方向に向かって伸びていく時に、それぞれが自分の命綱をしっかりとって、前に向かって進みだしていく。その初年度というか、真っ只中にあったのが 60 年前です。未来が見えて、希望が持てて、何もしないと沈んでしまうけれども、これをすれば何とか助かるというものが見えた時代です。

歴史は繰り返します。来年は泥沼だ、酷いという話が沢山出るけれども、<いや、その中でも私はこういう道で行くのだ>という命綱を掴めた方は生き延びて、更に大きく伸びていけると思います。そしてそれは必ず、誰かを助けていくことがセットで付いてくると私は思っています。

以上で本日の講話を終了します。有難うございました。